五味川純平
ごみかわじゅんぺい

1916年　満洲に生まれる
　　東京外語英文科卒
　　満洲にて就職，応召
1948年　引揚げ
著　書　『人間の條件』『自由との契約』
　　『歴史の実験』『孤独の賭け』
　　『アスファルト・ジャングル』
　　いずれも三一新書
現住所　東京都渋谷区神宮前1—15—3

戦争と人間　4　　**定価　260円**

1965年12月13日　第1版発行

著　者　©　五味川純平
　　1965年
発行者　竹村一
印刷所　暁印刷株式会社
製本所　株式会社 永井製本所

発行所　株式会社 三一書房
東京都千代田区神田駿河台2の9
電話東京(291)3131～5番
振替東京　84160番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　三一新書 508

戦争と人間

4

髑髏の舞踏

第一部

五味川純平著

三一書房

戦争と人間

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

髑髏の舞踏

第一部

1

昭和六年九月十八日、運命の夜、奉天北方三百五キロの長春では、軍隊側主催で軍・官・民連合の宴会が商埠地の支那料理屋でひらかれていた。主賓は、満洲視察の途中立ち寄った元の参謀総長で、在郷軍人会長になっている鈴木荘六大将である。

酒宴は、いつでも、どこでも、同じである。はじめは、みな、おとなしく呑んでいるが、そのうちに、ちょこまかと動きだすのが出てくる。お流れ頂戴というやつである。

献盃だの返盃だのが、あちこちではじまる。座がそろそろ乱れてくる。

長春の住人で退役中佐の依田長久は、軍人のテーブルばかりをまわって、鈴木荘六のところまで一巡すると、伍代喬介（ごだいきょうすけ）のそばへやって来た。

「……爺さん、何しに来たと思う？」

鈴木「閣下」の前では卑屈なほどにへりくだって盃を頂戴した依田が、そう云うのである。多勢がごった返しているから、少々のことなら聞かれる心配もない。

「知らんな」

喬介は無愛想に云った。

「満洲の在郷軍人に折りがあったら発破でもかけようってんだろう。東京でやって、受けたからな。やるんなら、現職のときに、済南事件でなぜ思いきってやらん！　いまさら、焼きのまわった爺さんの出る幕じゃない」

「そう云ったもんでもないだろう」

依田は鈴木荘六の方を見たが、将校たちが入れ替り立ち換りして、視線をさえぎられた。

「ここの長谷部旅団長と戦略の打合せをするには、現職の軍人でない方が都合がいい面もあろうじゃないか」

「……そんなものは、とっくに決まっとるよ」

喬介は、口調だけはますます無愛想になった。彼は、その朝、奉天の八達公司へ派遣しておいた高畠(たかはた)から電報を受け取っていたのである。

「トリヒキ一九ヒマデ　ニオワルミコミ」

取引が十九日までに終るだろうというのは、十九日までに変事が起こりそうだということである。

喬介は関東軍の作戦主任参謀・石原莞爾中佐の作戦能力を信頼していたから、奉天での軍事行動については、心配していなかった。したがって、奉天にある伍代一族の財産についても懸念は持たなかった。問題は、長春である。長春には、南方約六キロの南嶺に、奉天直系の歩兵一連隊と野砲一連隊、兵員合計約三千六百と火砲三十六門があって、事が起これば必ず日本軍を粉砕してやると、日ごろから豪語している。この他に、長春城内に約二大隊、寛城子に約一大隊がある。これに対して、日本軍は、第三旅団司令部の下に歩兵第四連隊が駐屯しているが、連隊の実力は戦時編成でないから、二箇大隊、機関銃隊、歩兵砲隊、山砲三門、兵力一千弱にすぎない。(註一)

奉天で事を起こすと同時に、長春でも奇襲して一挙に南嶺を屠る手筈になっているかどうか？

喬介は盃を含みながら、テーブルからテーブルへ見渡したが、将校たちは痛飲し、放吟して、二次会へ繰りこ

んで行きそうな様子であった。
今夜ではないのか？
今夜と知って、やっているのか？
知らずに、今夜奉天で事が起これば、南嶺は抜けない！
「依田さん、俺は失敬する」
喬介は、ふいに席を立った。
「どうしたね、急に」
依田が酔いが来た眼を上げた。
「これから将校連中を誘って、綺麗どころを総揚げにしようと思ってるんだ。あんたも片棒担いでくれんか」
「費用は半分俺が持つ。女に用があるのは俺なんだよ。急にもよおしてな」
喬介はだれにも挨拶せずに、階下へ降りて行った。
外は冷え冷えとしていた。昼間は埃りっぽい空気も、澄んでいる。空に、星屑が、高かった。
高畠からは次の電報が入っていないらしい。入れば、喬介の本拠である四通公司に詰めている者が宴会場へ持って来たはずである。
喬介は時計を見た。九時を少しまわっていた。
後ろから、馬車がゆるやかに蹄の音を立てて来て、喬介と並ぶと、乗っている女が云った。
「伍代さん、どちらへ？」
「……おぬしか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

喬介は、鴻珊子の顔というよりも、脂ののった張りのある肌に眼をやった。
「禿鷹は腐った肉をついばむというが、おぬしは生きとる男を必ず咥える特技があるな」
「まだ咥えちゃいないわ」
珊子が厚い唇で笑った。
「咥えましょうか」
「よかろう」
喬介は馬車に足をかけた。
「田伏旅館へやってくれ」
「あんなところで！」
「まずいか？」
「厭だわ！　あんなとこ、どうせ、襖一重でしょ、隣りと」
「支那の高官連中の閨房のようなわけにはいかんな、それは。それでも、みんな用を足しているんだ。心配するな。声を立てても文句を云うやつはおらん。襖一重の国境線は、双互不可侵だ」
馬車は走りだした。
喬介が田伏旅館を選んだのは、情事に便利だからではなくて、非常の場合の連絡に好都合だからである。
旅館のおかみ、田伏まさは、伍代喬介と鴻珊子の組合せを見て、口では愛想を云いながら、眼ではしきりにい

ぶかった。喬介の方は遊びがてらに仕事の話をしに来るが、女の方は初顔である。それも、こんなところに、男としけこんで来る女には見えない。人品がではなくて、金のかかった恰好がである。肉感的で人をくった様子は、ただの女ではないが、こんなところにくすぶっている男たちの相手になるような女とは思えない。

「おかみ、風呂は沸いているか」

喬介が云った。

「ええ。でも汚れていますよ、少し。なんなら、はり替えさせましょうか」

「かまわんさ。どんどん沸かしてくれさえすればいい」

おかみの案内で、喬介は珊子を促して奥へ通りながら、おかみに云った。

「公司に電話しておいてくれ。俺はここに沈没しているとな」

風呂焚きの雷太(らいた)少年は、おかみに云いつけられて、新しく火を焚きつけた。冬でもないのに、めったにないことである。

はじめは、だれが入るのか、知らなかった。いいかげん焚いたら、あとは入浴客が勝手に水をうめればいいのだから、焚き口を離れてもよかったのだ。そのとき、男と女の声が、こもった蒸気のなかから聞えた。

雷太は換気口のそばに、だれにも気づかれない覗き孔を作っておいた。ふだんは栓を詰めておいて、若い女中が入るときに覗くのである。ひところは熱病のように熱中したが、同じ女の裸体は見飽きて、近ごろはめったにやらなくなっていた。それというのも、その覗き孔から見えたかぎりの女の体は、この少年に官能の秘密を教え

て去った戸越ユキの肉体ほど魅惑的ではなかったせいかもしれない。
その夜の女は、驚くに値した。はじめは、豊満な女の体が湯舟のなかで、乳色から桜色に染まってゆくのが美しかった。雷太は、めったに味わえない昂奮を予想して、緊張しきっていた。予想は裏切られなかった。昂奮の絶頂は突然に来た。女が、湯のなかで、立ち上ったのだ。濡れて光っている女の胸いっぱいに麓をひろげた驚くばかりに豊かな乳房と、その深い谷間が、雷太の瞳を焦がした。女は湯舟のふちを跨いで出た。腰骨のあたりから下へ、急にまるくひろがって張り出た、部厚い、豊饒な臀と太腿が、少年から完全に息を奪った
あいにくなことに、男の幅広い背なかが邪魔をした。その男は、無防備な女の裸身に何でもできる距離に腰を据えていた。雷太は男を呪いながら、男が何かをはじめるのを待っていた。
男が云った。
「……奉天はどうだった？」
女は、はずした。
「背なかを流しましょうか」
これは、雷太には、ありがたかった。女が男の後ろにまわって、膝をついたのだ。雷太の瞳のなかは、ゆで卵をむいたような、つるりとした、雄大な女の尻でいっぱいになった。
「……アマカスさんがハルビンに行ったらしいわ」
アマカスなんて、どうでもいい！
「……間島は、やめにしたのかな」
喬介がそう云ったのは、甘粕正彦が、かねてから、間島地方に発火点を求める謀略を行なう計画を持っていた

ことを知っていたからである。甘粕正彦は、元の憲兵大尉、関東大震災当時の大杉栄殺しの下手人で、服役中減刑されて、当時の建川美次大佐の援助でパリに遊び、帰国後、渡満して、満蒙問題武力解決のきっかけを作るための謀略に従事していた。(註二)

「間島はインネンをつけるには都合がよくても、重要さの点では、やっぱりハルビンだわね」

女はそう云ってから、体をくねらせはじめて、急に鼻声になった。

「駄目よ、駄目よ」

男が手を後ろへまわして、何やらしたらしいのである。

「そうさ。ハルビンは急所だ。しかし、甘粕の狙いがこんなふうにうまく当るかな」

雷太の瞳のなかで、女の尻のうねりが激しくなって、視界から半分ほどはみ出るかと思うと、反対側へ揺り戻して行った。それでいて、口で云うことは、尻が表現することなどとはおよそちがっている。

「やるわね、きっと、関東軍は。だけど、どこまで？　武力占領？　それとも、親日政権かしら？」

「それをおぬしから聞こうと思って、ここへ連れこんだんだぞ。とぼけちゃ困るな」

「参謀本部の建川第一部長が来るはずよ、奉天へ」

「なに？」

裸像は、男も女も、動かなくなった。

喬介は、高畠から、そんな情報は得ていない。

「今夜あたり、奉天に着いてるんじゃないかしら」

三年前、張作霖爆殺の前夜に関東軍が奉天に集結したときにも、中央からのそんな動きはなかった。

東京の兄、伍代由介からも何も云って来ていない。軍部と連絡を取っている由介の秘書の武居が探ぐりそこねたのか？

美貌の姪由紀子も、参謀本部の柘植大尉から情報を聞き洩らしたのか？

喬介は激しい音を立てて湯をかぶった。これで、雷太にとっての絶景は、カットされたフィルムのように消えてしまった。女が、しぶきを避けて、雷太の視界の外に切れたのだ。

代りに、恥かしげもなく前をさらした男が立っていた。

「今夜だぞ」

男が云った。

「なぜなの？」

女の声が、圧倒的に豊満な尻が見えないだけに、甘ったるく聞えた。

「おぬしが云ったとおりならば、だ。建川が、制めるような男か」

女は何も云わなかった。

「あがろう。情報待ちだ。時間はある。今夜をおいては、ゆっくりおぬしにアクを抜いてもらう閑もなくなりそうだ。おぬしもじっくり考えるさ。この次にはだれを咥えればいいかをな。云うまでもなかろうが」

「そうね。悪くない考えだわ。そうしましょう」

女は、最後に、雷太に恩典を与えた。雷太の方へ向いて、湯の玉が滑り落ちる肌を拭いたのだ。

2

長春駐劄部隊司令官の歩兵第三旅団長・少将・長谷部照俉は、九月十九日午前零時十五分ごろ、奉天で日支両軍交戦中という通報を受けた。長春鉄道事務所（満鉄）宿直からの電話である。

隷下の将校たちの大部分は、在郷軍人会長・鈴木荘六大将の歓迎会のあと、二次会をやって、散会してから間もないころであった。

当時の長春駐劄部隊の行動については、奉天で事変が起こることを想定して、軍の作戦計画を次のように規定していたようである。(註三)

一、まず歩兵一部隊をもって南嶺の砲兵営を奇襲し、その火砲を破壊する。

二、旅団長は歩兵第四連隊の主力を率いて鉄道輸送で奉天へ南下する。南嶺奇襲部隊は任務達成後奉天へ本隊に追及する。

三、長春満鉄付属地および商埠地の警備は、連隊付中佐が留守部隊と義勇隊や警官隊を指揮して任に当り、情況最悪の場合には在留邦人を兵営内に収容して、兵営を固守する。

長谷部旅団長はこの方針に従って、第四連隊長・大島陸太郎大佐に南下準備を命じ、一部隊をもって南嶺砲兵営の奇襲に当らせることにした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com